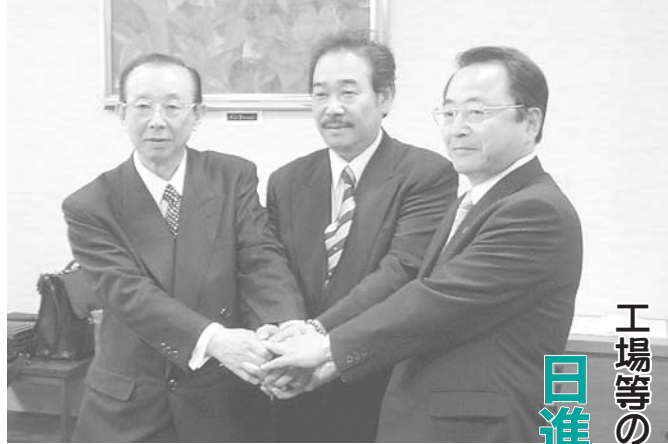


工場等の立地に関する覚書を交換



日進産業(木次町)・フレッシュユ フーズ山陰(加茂町)が進出

木次町西日登へ進出する㈱日進産業(石子達次郎代表取締役)と同じく加茂町南加茂への進出が決まったフレッシュユフーズ山陰(園山正彦代表取締役)への「島根県企業立地促進条例に基づく立地計画認定書」の交付と、両社と雲南市、島根県による「工場等の立地に関する覚書」の調印が島根県庁において4月24日と5月11日にそれぞれ行われました。



東京都に本社を置く㈱日進産業は、独自技術により高機能の断熱塗料を販売されており、島根工場では、断熱塗

料を塗布した高機能建材の研究開発・製造を行う予定です。一方、フレッシュユフーズ山陰は、カット野菜の製造など食品の加工・販売をする新企業で、両社ともに、平成18年7月から事業を展開する予定です。

また、4月25日には、市役所で雲南市企業立地計画認定書の交付式が行われ、㈱日進産業とフレッシュユフーズ山陰、昨年生産設備を増設された日本コルマー(株)(加茂町・神崎友次代表取締役社長)の3社へ、速水市長から立地計画認定書が手渡されました。

雲南市企業立地計画認定書交付



写真右から石子代表取締役、速水市長、神崎代表取締役社長、園山代表取締役

新たな雇用創出・産業の活性化に繋がる今回の立地計画に基づき、島根県、雲南市では、同社への資金面・雇用確保の面で支援・協力を行っていきます。

農委だより「いなたひめ」

全国農業会議所会長賞を受賞

全国農業会議所・全国農業新聞が主催する第12回全国農業委員会だよりコンクールで、雲南市農業委員会発行の農委だより「いなたひめ」が全国農業会議所会長賞(第3位)に入賞しました。

これは、農業委員会が発行する広報誌の奨励と相互研鑽を図るため、平成6年度から実施されており、12回目となる今回は都道府県農業会議による審査・推薦を経た全国35農業委員会から応募がありました。

審査員講師では、「企画・編集・取材等を農業委員自らが参画し、読者の関心を引き付ける記事の配列や読みやすい文章スタイルなどレイアウトにも十分な気配りが伺える。また編集内容についても「農地」「担い手」「地域農業振興」の関連記事をバランスよく取り上げ、地域における遊休農地の解消や



表紙デザインは土江良治情報委員長が手がけています。

担い手育成の取り組み状況、担い手の活躍などの地域情報が豊富、農業委員会法改正や食育関連記事等の問題をとり上げ、農業委員会活動の推進に大きな役割を果たした」との評価を受けました。

吉田町発

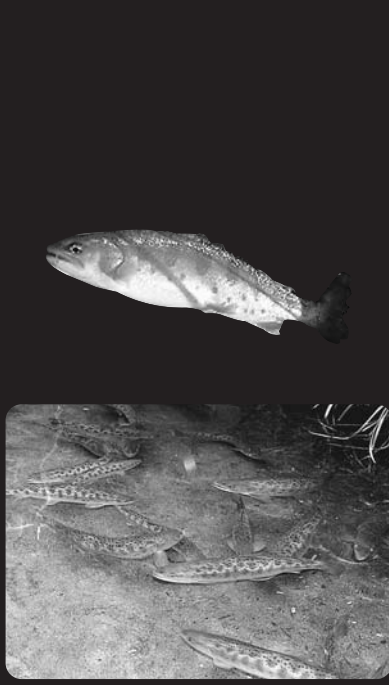
わがまちの

巧み

この「巧み」では、地域に根付いている伝統工芸や地域ならではの活動をされているみなさんを紹介していきます。

「山女の人工飼育」

今月は、吉田町芦谷地区にお住まいで、天然の湧き水を利用したヤマメの飼育を手がける鐵尾イチ子さんを紹介します。



鐵尾さんは、昨年からの農作業や家事などの合い間をみて、ヤマメの人工採卵・孵化・稚魚育成・成魚飼育をされています。

飼育のきっかけ

昭和40年頃から、「ご主人の岩市さんとともに、自宅前の深野川産のヤマメを養殖・販売されてきました。一昨年の6月、岩市さんを亡くされ、その当時は、「自分一人で飼育を続けるのは無理だ」と思っていました。しかし、岩市さん手づくりの養殖池や孵化槽内で元気に泳ぐヤマメの姿に、「主人と二人で手がけてきたヤマメの養殖を、ここで絶やしてしまふのも、主人に申し訳ない」との想いと、娘さんたちの励ましのおかげで、「自分でできる範囲で飼育を続けよう」と決意されました。

現在、これまで岩市さんと培ってきた経験を活かしながらヤマメの人工飼育に取り組みまれています。

ヤマメの飼育

現在、鐵尾さんの養殖池では、昨年孵化したヤマメ200匹と今年孵化したヤマメ500匹が



5 cmほどに成長したヤマメ

泳いでいます。秋になれば人工採卵をし、約2か月で孵化。その後、徐々に餌付けをし、3 cm〜4 cmほどに成長したヤマメの稚魚たちは、春には別の養殖池へと移されます。孵化槽や養殖池へは、自宅の裏山から絶えず冷たい湧き水が流れ込んでいます。

鐵尾さんは「ヤマメの成長は、飼育水に左右される。大雨時の泥水などに注意しながら、新鮮な湧き水を絶えず流し、循環させないと



ヤマメの飼育は難しい」と話されました。

鐵尾さんのヤマメ

鐵尾さんの飼育するヤマメは、長年の累代飼育により、純粋な斐伊川水系のヤマメで、現在、9つある養殖池のうち1つを利用し、飼育されています。

また、昨年末には、島根県立宍道湖自然館「ゴビウス」へも寄贈されました。現在、育てたヤマメの販売などはされていませんが、鐵尾さんは「これまで支えられてきた地域の方へのお礼や、主人の取り組みを絶やさないためにも、これからも自分ができる範囲でヤマメの人工飼育を続けていきたい」と話されました。